

「南に窓を」——金素雲の訳詩一篇

金素雲の訳詩について書こうとすると、あれもこれもとさ
まざまな思いが浮かぶ。訳詩そのものも、訳された詩も、あ
まりに美しく、心動かされるものが多いからだ。むかし、学
部学生のころは、薄っぺらな三笠文庫の大山定一訳『ドイツ
詩抄』をずいぶん愛読したものだ。中年をこえてからは、
岩波文庫版の金素雲訳編『朝鮮詩集』に同じような愛着をお
ぼえる。ページをあげて出くわした詩に一夜、数時間、心を
吸いこまれていることが多い。

ここでは、『朝鮮詩集』のなかでももっともよく知られた、
平明な一篇、金尚鎔（キムサンゴン）一九〇二—一九五二の「南に窓を」
をとりあげて、少しばかりの読みを試みてみよう。

南に窓を

金尚鎔

南に窓を切りませう

畑が少し

鎌で掘り
手鋏で草を取りませう。

雲の誘ひには乗りますまい

鳥のこゑは聴き法楽です

唐もろこしが熟れたら

食べにお出でなさい。

なぜ生きてるかつて、

さあね——。

こうして手で写しとってみるだに、心の奥がほんのりとあ
たたかく、嬉しくなって、微笑が湧くような気がする。こう
いう詩こそ読み「法楽」というものだろう。

深刻にしかつめらしいところはおよそなく、陽気すぎると

芳賀 徹

ころももちろんない。水のように淡々としていて、風のようにかるやかで、日向のぬくみを宿している。そしてそこに、中老の東洋人がひとり、少し時代おくれの「拙」を守って、こちらを向いて微笑している。その手にも顔にも、また衣服にも、土と風とお日さまの匂いがしみこんでいる。——そのような印象を与え、映像をよびおこす詩は訳詩である。

金尚鎔の原詩は訳詩と同じ十行で、そのなかに第一行の「南」と「窓」の二文字しか漢字を使わず、あとはすべてハングルだが（それが私には読めないのが残念だが）、金素雲の訳詩では漢字が二十三字にふえている。だが、こちらでも漢音読みは「聴き法楽」の「法楽」と「唐もちし」の「唐」だけである。あとはみな訓読みで、詩中の人物が眼に見えぬ話相手、つまり読者に、ひとりごとのように語りかけるくつろいだ調子は巧みに生かされている。金素雲は漢字と仮名の使いわけと配置にきわめて鋭敏だったが、ここでも選ばれた漢字が一字一字みな美しく見え、美しくひびく。

南に窓を切りませう

まことに軽やかに始まる第一連第一行である。第四行の「手^かで草を取りませう」と対をなして、人の心を軽くしていそいそと仕事に向かわせるようなないざないの調子である。

といって、誰か他人を誘うのでももちろんなからう。自分自身を心たのしくいざなっているのである。『朝鮮詩集』の柳致環の「点景から」の終りに——

峠にまどろむ雲を見ながら

たまさかのあすの一日を

口笛吹き／＼過して来よう。

とあったが、そんな口笛を下手でもひとりで吹いているかのようだ。あるいは誰も聞いていないのをいいことに、中老の男がむかしおぼえた歌の切れはしをハミングしているかのよらかな雰囲気さえある。（そういえば金素雲氏自身、ときどき口笛を吹いたり、歌をくちずさんでいたりしたような気がする。）

金素雲は一体どこからこのようなしゃれた軽快な口調を学んできたのであつたらう。戦前昭和のサラリーマンたちの、あのちよつと「モダン」でペーソスのある流行歌からか。大正の西条八十の童謡「唄を忘れた金糸雀は 後の山に捨てましようか」（大正7）や、北原白秋の「雨がふります 雨がふる いやでもお家で 遊びませう」（同）の類からか。あるいは堀口大学『月下の一群』（大正14）のラディゲやコクトーの口語会話体の訳詩からであつたらうか。もちろんそれは、ど

れかある一詩集から来たと特定できるような事柄ではあるまい。言葉のひびきとすがたに異常に鋭敏だった金素雲が、日本での長い生活と読書の間におのずから身につけた言いまわしだったのだろう。だが、それでもしいて源流を求めれば、その一つはたとえば上田敏訳のポオル・フォオルの「別離」〔牧羊神』大正7〕といったところにあつたかもしれない。

せめてなごりのくちづけを浜へ出てみて送りませう。

いや、いや、浜風、むかひ風、くちづけなんぞは吹きはらふ。

せめてわかれのしるしにと、この手拭ハンカチをふりませう。

この歌謡のような軽やかな調子で、詩人は自分自身にむかつて「南に窓を切りませう」という。日本語で「炬を切る」とは普通にいうが、それと同じ程度に「窓を切る」と日常にいうものかどうか。少くとも建築家や大工の棟梁はこの言いかたを使っているのかどうか。いまの私はまだ確かめきれないでいる。だが、ここではこれが、ただ「開けましよう」（金思燁訳）とか「作りましよう」とかいうよりも、はるかに効果的であるのはたしかである。

文字どおり「切れ味」がいいのである。ぼっかりと窓が切り開かれて、そこから一気に日の光と風が屋内に溢れこんでくるような気さえする。しかも、この言いかたは詩人の夢の住まいが、日本式の庵いりやなどではなく、韓国式の石と土の小屋屋であることまで語っているように思われる。日本では寺院や書院造り、数寄屋造りなどの上層階級の邸宅、あるいは茶室をのぞけば、普通の庶民の住まいには角窓も円窓も連子窓も書院窓もなにもなかった。長いこと藪戸しんぐ上下に開ける板戸）や、縁側ぞいの板戸や障子や襖しかなく、それだけで採光と通風を調節してきた。窓というものが普通の庶民住宅に登場するのは、ガラスの普及とともに、なんと大正末期になってからのことだという（上田篤『日本人とすまい』岩波新書、昭和49）。

だいたい、この詩には、この第一行の「南に窓を切りませう」をのぞけば、主人公（詩人）の住居そのものについては他ににも語られていない。それほどに簡素な半隠者風の棲みかたなのであろう。またそれほどに「南窓」のあることが肝要なのでもあろう。主人公はおそらくなにかゆえあって、この日当りのいいらしい小さな土地にひきこもり、ここにいま板の住まいを設けた。そしてなによりもまず南面の土壁に「窓」を一つ切ったのである。

この詩全篇に漂う静かな諦念のなかのオプティミズムが、

すでにこの第一行に示唆されているといつていいが、その田園閑適の態度と、さらに「南に窓」のモチーフは、さかのぼるとおそらく陶淵明を源泉としているのではなからうか。陶淵明は四十一歳のとき(四〇五)、官を辞して家郷に帰ると、あの有名な「帰去来の辞」を賦して、園田にあって「天命を樂しむ」ことの深いよろこびをうたった。「草屋八九間」「園田の居に帰る」(其一)ともいうその家には、「南に窓」があったのである。――

引壺觴以自酌 壺觴(德利と盃)を引きて以て自ら酌み

眄庭柯以怡顔 庭柯(庭木の枝ぶり)を眄めて以て顔を怡

ばす

倚南窗以寄傲 南窓に倚りて以て傲を寄せ

審容膝之易安 膝を容るるの安んじ易きを審かにす

園日涉以成趣 園は日に(毎日)涉って以て趣を成し(足

どりもはずみ)

門雖設而常閑 門は設くと雖も常に閑せり

……

(一海知義編『陶淵明』世界古典文学全集25、筑摩書房、昭和45)

「傲を寄せ」とは贅沢な気分になるにまかせるとのことだという。つまり、ひとり酒を酌み、庭木を眺め、南側の窓へ

にもたれているだけで、なにか悠々とゆたかな気分になって、この狭いわが家(「容膝」)こそほんとうに落着けるところだとわかった、というのである。「南に窓を」の詩人金尚銘も、おそらく遠くこの陶淵明にならって、心の贅沢の一つの大事なよりどころとして「南に窓を切」だったのであったにちがいない。

「南に窓を」の第一行にばかり長くこだわった。だが、それもこの映像がいかに美しく、決定的で、また東洋の詩の奥ゆき深い遠望へと小さな窓を開くものであったからである。

この住まいにはわずかの畑もついている。中国晋代の小地主陶淵明先生ほど豊かではないにしても、ある程度までは自給自足もできる構えであつたらしい。詩人は霞を食って生きる仙人ではない。本職の農夫ほど上手ではなくとも、みずから農具をとって働き、その労働をよるこぶ人だった。

畑が少し

鎌で掘り

手鎌で草を取りませう。

少しばかりの畑ながら、自分の鎌でおこすのである。鎌を打ちこむと、カチンと鳴って次々に石ころが出る。それを拾

つては畑の外に投げ、のろのろと進む仕事だろう。やがて唐もろこしや野菜の種などを播くのだろうが、それよりも早く雑草がしつこくはびこる。それを「手鋏」で根まで削りとるようにして取ってゆかなければならない。農耕は連日の勞苦を強いるきつい仕事なのである。

だが、それは手ごたえのある、手ごたえを通じて心への報いもある労働であるらしい。金素雲訳で軽やかに「手鋏で草を取りませう」というとき、詩人はいそいそとして、楽しんでこの土と石ころと雑草相手の仕事に打ちこんでいることが伝わる。わずか四行、二十字にも足らぬこの連のなかに、

「鋏」と「手鋏」と二つの農具の名が出てくるのは、これらの農具の大切さ、またそれへの愛着をいうのにはかななるまい。「手鋏」とはごく短い木の柄のついた、小さな頑丈な鉄製の半円の鏡のついた農具。除草に使い、春になれば女たちが野に出てこれで食用の野の草を掘る。「ホミ」と韓音で言っただけで、その道具の感触も、手にかかる重みも、その道具の使われる韓国山村のさまざまな情景も、みなよみがえってくるのだから。

しばらくは「手鋏」で草を取るのばかりが忙しいような畑でも、いたしかたない。その仕事に没頭することがかえって想念を浄化してくれる。それに、廬山の麓、柴桑村の大先達陶淵明先生の畑にしても似たようなものだった。陶先生みず

から「園田の居に帰る」其三に「草盛んにして豆苗稀なり」と歎いていたではないか。――

種豆南山下 豆を種う 南山の下

草盛豆苗稀 草盛んにして豆苗稀なり

晨興理荒穢 晨に興きて荒穢（雑草や石ころ）を理め

带月荷鋤歸 月を帯びて鋤を荷いて帰る

道狹草木長 道狹くして草木長

夕露沾我衣 夕露我が衣を霑す

衣沾不足惜 衣の霑うは惜しむに足らず

但使願無違 但だ願いをして違ふこと無からしめよ

（一海知義、前掲書）

陶淵明もただ、せっかく植えた豆が雑草に負けずによく育ち、よく実ってくれることばかりを、はらはらしながら願っていたのである。淵明の畑よりはさらにささやかな土地を耕すにすぎないにしても、「南に窓を」の詩人はたしかに、淵明以来の東アジアの田園詩人、というよりも農耕詩人の長い系譜の一端に列なっていたといえよう。

ヴォルテール『カンディッド』（一七五九）の主人公は、哲学者バンブロスや愛人キェネゴンドとともに、西半球全域をおおうほどの惨憺たる浮沈の冒険を経たあげく、最後によ

うやくコンスタンチノール郊外に小さな耕地を入手して、
「あれどわれらが畑を耕さねばならぬ」(Mais il faut cultiver notre jardin.)との智慧に達した。だが東アジアの風土では、内面においてはともかくも、外面においてまでそのような愚かな波瀾を経なくとも、「畑が少し／歛で掘り」の叡智にいたることのできる径が、すでに伝統として設けられていたのである。

しかし、いうまでもなく金尚鎔は近代の人、陶淵明から千五百年後の詩人である。淵明の偉大からはもう遠い。誘惑も彷徨も屈辱もさらに繁く、それに傷つくことさらに深かったのにながいがいい。だからこそ第二連には、「雲の誘ひには乗りますまい」と既往への一種の自戒をこめていたのではなからうか。

雲の誘ひには乗りますまい

鳥のこゑは聴き法案です

私には、この主人公はさまざまの遍歴を経たあげく、ようやくここに自足安分の地を見つけて安堵した人と見えている。はじめからこの地に土着していた人ではあるまい。だからいま、「南に窓を切りませう」といい、「雲の誘ひ」には「も

ういい」と答えるのであろう。

畑を耕していてふと見あげる空の雲、あるいは南の窓べに憩っていて眺めやる雲、それらはみな美しく、かなたへとまた心を誘う。詩人はもちろん心を魅せられる。だが、もう彼には行雲流水、一処不住の境涯はいらないのだ。それはもう卒業したのだ。日本の詩人芭蕉のいったとおり、「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」「旅を栖と」し「旅に死」んだ古人(『おくのほそ道』)もたしかに多かった。李白は潯陽に、杜甫は洞庭湖畔に客死し、日本の西行も宗祇もまた芭蕉自身も旅先に死んだという。だが、一方、東洋の詩人には「廬を結んで人境にあり…心遠ければ地自ら偏なり」(園田の居に帰る)具二と詠んだ陶淵明の系譜もある。自分の心が世俗を遠く離れることさえできれば、村に帰ってきて住みつき、そこで死を迎えることもまたよいのだ。陶淵明は同じ詩に、右の句につづけて――

采菊東籬下 菊を采る 東籬の下に

悠然見南山 悠然として南山を見る

とうたい、「帰去来の辞」には――

策扶老以流憩 扶老(藤)を策つきて以て流憩し(そぞろ

歩き)

時矯首而遐觀 時に首を矯げて遐観(遠望)す

雲無心以出岫 雲は無心にして以て岫(山の峯)を出で

鳥倦飛而知還 鳥は飛ぶに倦みて還るを知る

とも詠んでいた。

ましてここは、あたりの林にも頭上の空にも小鳥の声がたのしくあふれているような「自ら偏なる」地なのである。

「南に窓を」の詩人は明らかにこの陶淵明の伝統のなかにいる。「雲の誘ひ……鳥のこゑ」と並べたのも、あるいは右の「帰去来の辞」の雲と鳥の対句を、かすかにもせよ意識してのことであつたかもしれない。

それにしても金素雲の訳語のみごときは驚嘆に値する。金キム思輝シキ氏訳の――

雲が誘つたって行きやしません

鳥の歌は聞き放題です

にしても、もちろん正確で上手なのだろう。だが、金素雲は「雲の誘ひ」と名詞化し、それを次の行の「鳥のこゑ」とやわらかな対にした。そして「誘ひ」にに応じて「乗る」というびつたりの動詞を使い、それを「……には乗りますまい」と

自問自答ないし自戒の口調で結んだ。その代りに、というニエアンスで次の行には「鳥のこゑは聴き法楽です」とオプテイミズの全面解放に転ずる。この「ますまい」と「です」の使いわけによつて、両方の意味はそれぞれに重く強くなつて、しかもびつたりと釣合つたのである。「聴き法楽」などという訳語は、仏教用語から直接にはなく、「聞くも法楽、見るも法楽」といった成句から来たのだろうが、鳥たちの天真の声の与える法悦をさえ伝えて、美しくも完璧である。てにをは一つ、字面一つ、動かしようもないのが素雲の訳である。

唐もろこしが熟れたら

食べにお出でなさい。

わずかの畑を鋤で掘り、種播いたのが、ここでは陶淵明の「豆」ではなくて、唐もろこしだった。豆でも稗ひらや粟あやでもなく、韓国に多い蕎麦でさえなく、唐もろこしであることが、ここでどのような意味合いをもち、どのような情景を喚起するのかわからない。あまり水気の多い丘陵の斜面などを伐り開いて、この丈夫な穀物を播いたのだろう。それは季節のうつろいとともにも生い育ち、風にさわさわと鳴ったりもするのだろう。

「(それが)熟れたら／食べにお出でなさい」と、詩人には

もう丈高く突って赤い穂を垂らした唐もろこし畑の豊かさが、眼に見え、心に待たれているかのようだ。第一連には「南に窓を切りませう……手鋸で草を取りませう」と、われとみずからを促す言葉をしるしたばかりだったのに、季節のわずかなうつろいとともに、すでにこの土地に自信をもつて開き直った百姓詩人の声である。鳥のこえが溢れ雲が悠々と流れてゆくこの土地に、唐もろこしはたしかに甘く豊かに熟れるのちがいない。

それをやがて「食べにお出でなさい」と、自信満々に詩人はいうが、これを彼は誰にむかって言っているのだろうか。たまたま都会から彼のもとに遊びにきた旧友だろうか。その種の旧友に手紙でも書いているつもりなのだろうか。あるいは広く読者にむかってなのか、それとも結局は自問自答なのか。結局は詩人が自分の究極の理想の生活を描くために自己演出してみせている、その観衆、つまり読者、そして自身身なのであろう。一行一行にその語りかけの語調を変えて積みかけてゆく訳語のさばきは、あまりに手なみあざやかで切れ味よく、これが訳詩とは思えない。まして外国人の手になる訳詩とは信じられない。三好達治の詩だといって示せば、日本人の読者にはそのまま信じてしまう人が多いだろう。そういうえば三好達治にも「南窓集」という詩集があった（昭和7刊）。

そして最後に、画竜点睛ともいうべき第三連二行の訳が来る。

なぜ生きてるかつて、

さあね——。

これが金尚鏞の原詩では、むしろ金思燁氏の訳——

なぜここで暮すかつて？

そんな問いには 笑うだけ

の方に近く、あの李白「山中問答」の有名な起承の二句——

問余何意棲碧山 余に問う何の意ぞ 碧山に棲むと

笑而不答心自閑 笑って答えず 心自ら閑なり

を踏まえていることはたしかだろう。

金素雲は、これが李白によっていることがあまりに明白であるために、彼みずから李白を踏まえて、ここにいわば半創作を試みたのである。そしてそれがみごとにびたりときまってしまったのである。この訳詩二行の向こうに原詩は遠のき、李白はさらに遠い借景となった。しかも金尚鏞も李白も、訳詩の奥に寸分狂わず歪みもせずに見えている、といった気配

である。

こんなところになぜ苦勞してわずかの烟を作り、唐もろこしをあてにして、暮しているのか。そもそもなぜこんな風にして生きているのか。——いまさうそんなことを問う人には、もちろん、わずかのアイロニーと微笑をこめて「さあね」の一語でいいのである。いや、鳥のこゑが聴き法楽の日向のなかで、唐もろこし烟に没頭する詩人自身、そのような問いをみずから発することもとうに忘れてしまっていた。だから答えは、人に対してばかりではない、みずからに対してでも「さあね」の一語でいいのだろう。「さあね」しかないのだろう。

その答えがにこやかに寡黙であればあるほど、少くとも日本語では、「心自ら閑」なることがより深く伝わり、この地が「別に天地の人間に非ざる有り」であることが一層くつきりと浮かびあがる。訳者金素雲はそのことをすべて呑みこんで、第一連から第二連へ、そしていま第三連へと語法の転調もあざやかに、日本近代詩史に残るこの二行の点睛をほどこしたのであった。

なぜ生きてるかつて、

さあね——。